

西日本支部の創立とその後

西日本支部は昭和 61 年支部創立 50 周年という記念すべき年を迎えた。創立時からの資料を繙くと半世紀にわたる支部の足跡とその時代背景がよく読み取れる。本支部は関西支部に次ぐ二番目の支部として発足した。発足にあたっては、まず昭和 11 年 2 月 24 日九大農芸化学教室において有志による会合が持たれ、支部創立に関する立案がなされ、次いで翌 3 月には発起人会が開かれ初代支部長吉村清尚（鹿高農）、幹事奥田譲（九大農）、予備幹事平井敬造（九大農）の各氏が推挙されている。3 月 24 日の本部評議員会において支部設立案が承認され、支部資料 1 号には、「依テ申請通り、日本農芸化学会西日本支部ハ設立ヲ見タルモノナリ」と記されている。なお、設立に対し「交附金（支部ヘノ）百円也ヲ追送スルムネ通知アリ」との記録も残されている。同年 5 月 10 日九大農学部において総会、講演会が開催され、実質上この日をもって西日本支部が誕生したことになる。講演会では別紙のように 16 題の講演が行われたが、出席者が 107 名であったことは当時としてはいかにも盛会であったかを物語っている。なお、懇親会出席者 31 名の氏名

も残されているが、会費がいくらであったかの記載がないのが残念である。このような支部の創立にあたって貢献した一人に後に農芸化学会会長となった奥田譲教授が挙げられる。発起人の一人として、また初代幹事として尽されたみなみならぬ努力と苦労の跡は保存資料の随所に見られる。創立時の支部には現在の所属県以外に朝鮮総督府が加わっているところはいかにも西日本支部らしい点であり、戦前には仁川や水原でも例会が開催され、また、台湾支部との交流も持たれていた。戦火が激しくなった 19 年にも例会が開かれているが、「航空糧食に関する生化学的研究」なる演題などには当時のわが国の窮屈の一端がうかがわれる。19 年 10 月 2 日を最後にいったん中断した例会も、22 年 6 月に再開され、26 の講演が行われている。ザラ半紙に謄写版刷りのプログラムを見る時、戦後の混乱期における物資の乏しい中、学会活動の復活に向けて情熱を傾けた先人たちの努力と苦労の跡がしのばれ畏敬の念を感じえない。このような戦後の支部の建直しは、23 年から 5 年間の長きにわたり支部長を務めた山崎何恵教授（九大農）に負う所が大きい。

															講演題目	講演者
シア アスベ ン加ル 里の効 果の複 雑性に 素に就 て對す る	アンキ ンバニア ンヘの合 成により カナリ	牛 脂貯 藏中の 變化	亞 硫酸蒸 解の機 構に就 て	大 豆發芽 中に於 ける油 脂の變 化に就 て	飼 料によ る卵黃 油脂の相 異	家 蠶の發 育經程 度に於 けるミト ゲン	腺 カタラーゼ 及呼吸 作用相 互の關 係	微 生物に 關する 研 究(第一 一五報)	多 糖類の 研究(第 十報)	新 炭水 化物 及其構 造に就 て	桔 梗サボ ニンの膠 化學的性 質	蘇 鐵の生 化學的 研究(第 七報)	氣象と稻 叢組成との關係	煙草の硝 酸態並に アンモニア 態窒素の 吸收に就 て	西山祥二	
下山村 素何吉 恵	北川松 之助	管濱野 一郎	管濱野 一郎	片桐秀 政郁	佐々木周 郎	三山良輔	山藤一 雄	富安行 雄	西田屹 二	吉村清 尚	辻本孫三 郎	鈴木重 雄	久納佑 子		西田孝太 郎	

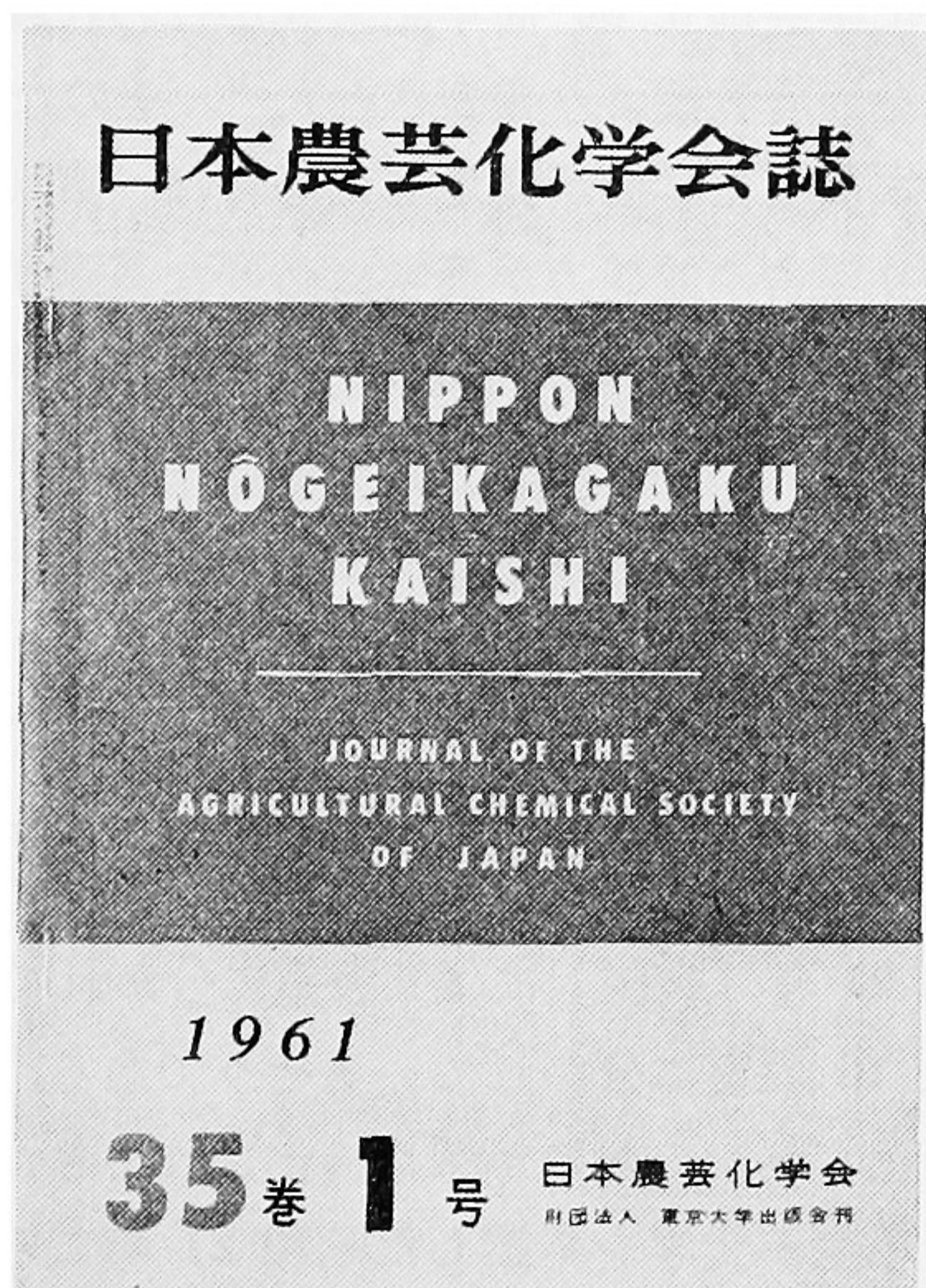
西日本支部創立總會における講演會（昭和 11 年 5 月 10 日）

く、なかでも 26 年の九大における農芸化学会臨時大会において開催された「澱粉の生化学に関するシンポジウム」が農化大会におけるシンポジウムの草分けとなつたことは特筆すべきである。その後、福岡で 3 度の全国大会が開催されたが、45 年の大会では例の「よど号事件」が絡み大会前日福岡空港を飛び発つよど号を不安気に見送られた会員も数多くおられることと思う。もちろん、乗客の中に会員の方もおられたこともあって、その安否を気遣う声が大会会場のあちこちで聞かれた。学会といえば懇親会がつきものであるが、55 年の大会の懇親会は九州の酒と山海の珍味を期待するかのように予想を 200 人も上回る多数の会員が出席した盛会なものとなつた。これを機に年々懇親会出席者が多くなるのを見るにつけわが支部の果たした役割の大きさに内心自負しているのは筆者一人ではなかろう。この大会では「座長を務めている間に講演予定のスライドが入ったカバンが消えた」との申し出があった。同じ国際学会のマーク入りの

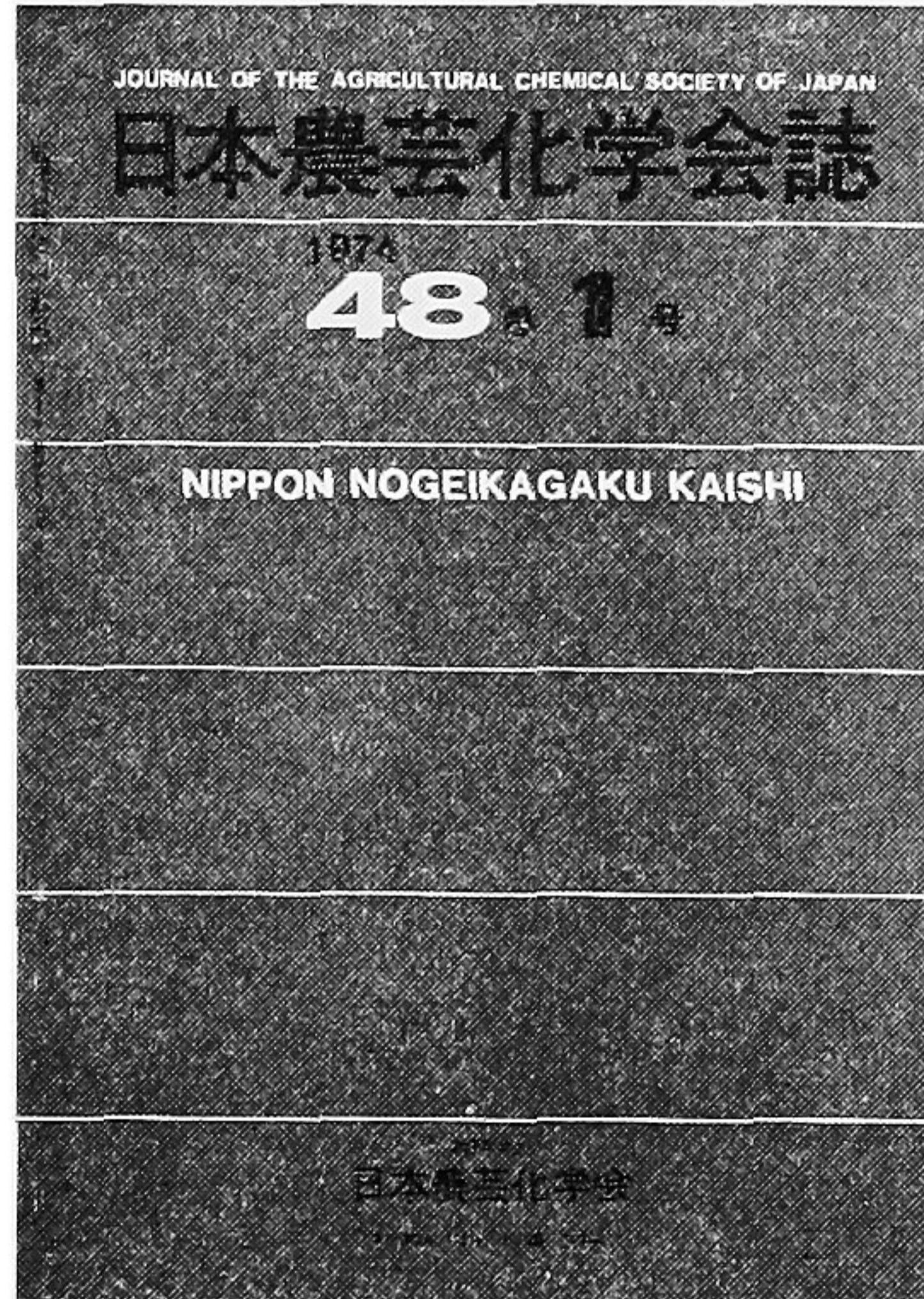
カバンを持った他の会員が自分のものと思い込んで持ち去っていたのである。今では懐しい笑い話で済まされるが当時は大会本部役員数名で青くなつて講演会場を探したものである。ハイジャック事件が学会に絡むことはそうないであろうし、またこのようなことが起らぬことを希望するが、カバン事件は今後も起こる可能性は十分にある。お互いに気を付けたいものである。

創立当時会員数 200 有余名であった支部も今や会員数 1,200 名を越える大世帯となり、例年開催される支部大会における演題数も 80 を越えるまでに発展してきた。本支部が中国一四国一九州一沖縄にまたがる 3 つの海峡を持ちながらこのように支部活動が活発なことは会員各自の熱心さもさることながら本支部が伝統的に Hospitality の精神をモットーに支部活動に取り組んで来たことによるものと自負してよからう。

(山崎信行)



第 35 卷 (1961)～第 47 卷 (1973) まで



第 48 卷 (1974)～第 60 卷 (1986) まで